

## 働くひとの未来研究所

Institute for the Future of Workers

### 研究所の概要

#### 1. 目的

個人と組織の相互成長を促進する研究と実践を進め、働く人の未来に貢献することを目指します。柔軟な働き方、職場の人間関係といった働きやすさ、働く人の自己実現のための機会や心理支援について調査研究を行います。

#### 2. 設置期間

2025年4月1日～2030年3月31日

#### 3. メンバー

10名（所長を除く）

#### 4. 活動概要

現代社会において、急速な技術革新や経済環境の変化、さらには多様な価値観の広がりにより、働く人が自身のキャリアや生き方を再構築する必要性がますます高まっている。一方で、仕事における満足感や充実感を得られないまま働き続けることによるストレスや燃え尽き症候群など、働く人のウェル・ビーイングを損なう問題も深刻化している。このような状況において、働く個人が自らのキャリアを見つめ直し、自分らしい未来を築くための支援が求められている。

本研究所は、個人と組織の相互成長を促進する研究と実践を進め、働く人の未来に貢献することを目指す。柔軟な働き方や職場の人間関係、働きやすさの向上、さらには働く人が自己実現を追求できる教育の機会や心理支援の在り方について調査研究を行う。



#### 所長

三好 きよみ

MIYOSHI Kiyomi

#### キーワード

キャリア自律、ワークモチベーション、ウェル・ビーイング、質的研究、テキストマイニング

### 令和7（2025）年度の研究活動内容及び成果

#### 1. 活動内容

##### (1) 職場・働く人の課題調査

- IT技術者のストレス要因とその対処についての調査分析を行った。
- リスクリング促進についての調査分析を行った。
- 職場の問題とその対処、及びチームビルディングのワークショップを行った。

##### (2) 研究成果の社会への還元

- JST 戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発）「職場における孤独・孤立化過程の分析—総合的予防プログラムの開発に向けて—」における、実装後の調査結果の分析を行い、論文発表した。
- 令和6年度 姫路市大学発まちづくり研究助成事業(2024年度)における実施結果を論文発表した。

- ・ 科研費基盤(C)「テキストマイニングおよびモデル化技法を用いたニーズの可視化に関する研究」について、論文発表した。
- ・ IT技術者のストレス要因とその対処についての調査分析結果を投稿し、国内論文誌に採択された。

### (3) 若手研究者への支援

- ・ 博士課程の学生に対して、質的研究法についてのレクチャ、及びスーパーバイズを行った。
- ・ 企業所属者に対して、研究手法、及び論文執筆についての支援を行った。

## 2. 成果

### (1) 国内外の学会へ論文投稿、及び学会発表

詳細は Research map (<https://researchmap.jp/kiyomi>) の論文、講演・口頭発表等のページを参照。上記に記載されていないものは以下。

#### 雑誌論文（査読付き）

- ・ 町永 信雄, 医薬品産業における産学官連携の構造的課題：実務担当者の視点に基づく質的分析研究 技術 計画 40(3/4) 413-427, 2025

#### 学会発表

- ・ 近藤 秀和, 女性 IT 技術者におけるストレスの特徴と緩和要因の探索 - テキストマイニングによるジェンダー分析 -, 第 16 回横幹連合コンファレンス, 2025 年 12 月 14 日
- ・ 木野 泰伸, 生成 AI を利用した地域課題構造の可視化, 第 16 回横幹連合コンファレンス, 2025 年 12 月 14 日
- ・ 貝増 匡俊, 就職移行期における若手の不安とその対処: 推し活継続の視点から, プロジェクトマネジメント学会 2026 年度春季研究発表大会, 2026 年 3 月 13 日
- ・ 支援対象の企業所属者が情報処理学会 IS 研究会にて、3 件の研究発表を行った。

### (2) 外部資金の獲得

- ・ 公益財団法人北野生涯教育振興会 2025 年度 生涯教育研究助成金 として、研究課題「リスクリテラシー尺度の開発とリテラシーに応じたリスクリテラシー促進支援の検討」が採択された。
- ・ 学術相談を受託し、企業の人材育成を支援した。

## 令和 8（2026）年度の計画

### (1) 職場・働く人の課題調査

職場環境や人間関係が働き方に与える影響の分析、リスクリテラシー促進等について、調査分析を行う。

### (2) 研究成果の社会への還元

研究所所属の研究者および所長の活動成果を、国内学会、および国際会議において広く情報発信

する。成果の一部については論文投稿を目指す。

(3) 若手研究者への支援

大学院生・若手研究者、企業所属者に対して研究デザインや分析手法習得等の支援を行う。